



Title	学内国際交流活動とグローバル人材育成：学生運営スタッフのPAC分析より
Author(s)	中橋, 真穂
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2017, 21, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60439
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

学内国際交流活動とグローバル人材育成

— 学生運営スタッフのPAC分析より —

中橋 真穂*

要 旨

今日、日本の大学においてグローバル人材育成に向けた様々な取り組みが行われている。本稿は、その中でも学内の国際交流イベントで運営スタッフとして活躍する学生に焦点を当てる。運営スタッフを担当する学生に対しPAC分析を実施することで、これらの経験とグローバル人材育成との関係を、彼らの視点から明らかにすることを試みた。結果、運営スタッフとしての経験が彼ら自身の成長につながると同時に、学内の国際交流活動の促進、グローバル人材育成に大きく貢献していることが明らかになった。

【キーワード】 PAC分析、インタビュー、グローバル人材育成、国際交流活動

1 はじめに

1-1 研究の背景

日本の大学において、グローバル人材の育成に向けた様々な取り組みが行われている。その代表的な取り組みの一つとして、海外留学・短期海外研修などが挙げられよう。短期・長期留学、語学研修、研究留学、インターンシップなど期間や内容に関わらず、海外での経験はグローバル人材育成においてその効果が数多く報告されている（例えば、宮本 2012、渡部 2009 など）。

一方、経済的理由や授業、企業インターンシップ、就職活動など時間的制約や語学力不足などの理由で全体の割合に対し1%程度しか海外留学を経験していないというのが現状である（岩城 2012）。また、日本人の海外留学者数は2010年前後に底打ち後、徐々に増加傾向にあるものの90年代の水準にまで回復するには至っておらず（文部科学省 2016）、「内向き志向」への懸念の声も挙がっている。特に「留学意向あり」の割合は文系女子が43%なのに対し、理系男子は23%と理系男子の方が低い（リクルート進学センサス 2013）。日本は高度成長期において「も

のづくり」により「技術立国」と形容され、商品やその技術力が世界に認められるなど理系分野が日本社会の発展に大きく貢献してきたことはいうまでもない。一方、理系は専門分野以外に無関心で付き合い下手（毎日新聞科学環境部 2007）、英語の苦手意識が比較的高い（リクルート進学センサス 2013）といわれている。さらに、研究が忙しいなどの理由で海外留学や学内の国際交流を敬遠する者もいる（中橋 2015）。しかし、グローバル化に伴い各機関の国際競争が激化する中、理系学生にとって先端科学技術の担い手として世界を舞台に活躍する能力は必要不可欠である。そして、これらの人材育成は日本社会にとっても急務の課題である。

こういった状況で、海外留学などの促進と並行し、より気軽に参加・利用することの出来る学内の国際交流機会や支援体制の整備は特に理系分野でのグローバル人材育成において重要なポイントとなってくるであろう。大阪大学工学部では国際交流機会として、留学生と日本人学生が英語で交流するイングリッシュカフェや季節ごとのイベントなどの実施や、英語での発信能力を高めるための支援としてランゲージサポートデスクの設置などを進めている。また、

* 大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センター助教

このような学内の身近なイベントへの参加やサポートの利用が結果的に海外留学を考えるきっかけになることも期待される。

1-2 研究の目的

以上のようにグローバル人材育成に向けた取り組みの必要性が叫ばれ、キャンパスの国際化に伴いより身近な国際交流機会や支援体制も益々重要になっていく中、学内での国際交流が学生に与える効果に関する研究も進められてきた。例えば小島他（2015）は、国内の国際交流がグローバル人材育成に重要な役割を担っていることをアンケート調査から明らかにし、大学における国際交流の利点や問題点を検討した。實平他（2004）は、キャンパスにおける交流プログラムが日本人に与えるインパクトについて調査し、日本人学生と留学生の相互理解を促進することに加え日本人学生を成長させるという面で非常に大きな役割を果たしたと指摘する。このように、海外から多くの留学生を迎える今、キャンパス内での国際化教育プログラムの重要性及び可能性の高まりから、これらのプログラムが学生に与える意義を検証することは非常に重要である（實平他2004）。

さらに久保田・鈴木（2016）は、留学生対象の日本語授業にボランティアとして参加する機会は、日本人大学生のグローバル人材育成に寄与しうることを明らかにした。ボランティアや運営側として各イベントに主体的に取り組むことで、結果的に学生自身の成長につながり、さらには国際交流分野においてリーダー的存在となることが期待される。この点について岡本（2011）は、日本を取り巻く環境の急激な変化に対し柔軟で先見性に富む優れたリーダーが、国力を結集し素早くかつ的確に対応すべき事態に直面しているとしている。そして、そのような優れたリーダーが日本の各部門において著しく不足しているとし、プルアップ教育の重要性を指摘している。後述するイングリッシュカフェをはじめ学内の国際交流イベントに主体的に取り組む学生の多くは、学内の国際交流においてリーダー的存在として他の学生を引っ張っていく重要な役割を担っていることが予想される。彼らのような存在が国際交流活動や海外留学・研修の促進につながり、結果的にグローバル人材育成への大きな貢献へと発展することが期待できよう。

そこで本稿は、学内の国際交流活動の運営などを

担う学生スタッフに着目する。先に述べた工学部で実施している留学生と日本人学生との交流の場であるイングリッシュカフェでは、学生運営スタッフが主体的に企画し運営を実施する。比較的、実験など研究での拘束時間が長く、先述したように一般的には英語が苦手な専門分野以外に興味のないといわれる工学部の学生がどのような動機でイングリッシュカフェ運営スタッフを担当し、どう成長したか、その意義や将来への可能性について検討する。そして運営スタッフとしての経験とグローバル人材に共通して求められる能力との関連性を検討する。これらの結果から、より活発な国際交流の可能性やグローバル人材育成について考察する。

なお、本題に入る前にグローバル人材の概念を整理したい。文部科学省（2011）は「グローバル人材」について、要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調、柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティといった3つの要素を示すとともに、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークとリーダーシップなどを要素として掲げている。本稿においても、これらの要素を多角的に持ち合わせた人材、さらにその中でも理工系分野におけるグローバル人材について着目する。

2 調査の概要

2-1 調査方法

本研究では、内藤（1993）が開発したPersonal Attitude Construct 分析実施法（以下、PAC）を用いる。開発当初より当該手法を用いた研究は多岐に渡っているが、その理由として次のような3つの利点が挙げられる。1. 質的研究と量的研究の長所を掛け合わせたものであり、2. 調査者は調査協力者の枠組みを用いて調査協力者の体験を理解しようとして、3. 調査協力者の報告及びその解釈はデンドログラムに基づいているため再現性が高い（末田2001）。海外研修参加者を対象に実施したPAC調査は、渡部（2009）、中川（2013）などがある。渡部（2009）は、研修参加前と参加後に海外研修についてのイメージを連想させ、そのイメージの背後にある現地での体験や意識変化などを明らかにした。中川（2013）は、「留学」と「自分自身」のイメージの変化の模索を通して、

異文化接触によるアイデンティティの変容について考察している。また、高梨（2012）は、地域日本語教室にボランティアとして参加する大学生がボランティアの経験に対してどのような意識構造を構築しているのかを分析した。その結果、地域日本語教室を実践の場と位置付け、困難や不安を抱きながらもそれらを乗り越える取り組みが明らかになった。これらを参考にしながら、本稿は特に、先に述べたように工学部で実施されているイングリッシュカフェの運営を担当する学生に焦点を当てる。

なお、調査協力者の負担を軽減するため、土田¹⁾が2003年に開発したPAC分析支援ツール（PAC-assist）を使用し、PAC分析を実施した。PAC分析の流れは以下の通りである。

- 1) 調査者が、調査協力者に連想刺激文（本研究では「日頃のイングリッシュカフェ学生運営スタッフとしての自分を振り返ってお答えください。学内の国際交流活動の運営を担当することは、あなたにとってどのような体験ですか。思いつくイメージを単語や短文でいくつでも書いてください。」）を提示する。
- 2) 調査協力者が、刺激文からイメージする言葉（短文）をPAC-assistに入力する（数に制限なし）。
- 3) 入力した言葉（短文）に重要度順に数字を付ける。
- 4) PAC-assistの比較開始ボタンを押すと、入力した言葉（短文）が2つずつランダムに表示される。調査協力者に、それらのイメージの近さを(1)非常に近い～(7)非常に遠い、の7段階で評価してもらう。
- 5) 4)で得られた類似度距離行列に基づき、ワード法によるクラスター分析（SPSS Version.22）を行い、デンドログラムを出力する。
- 6) デンドログラムをもとに各項目やクラスターについてインタビューを実施する（ICレコーダで録音）。
- 7) 6)までのデータをもとに、調査者により全体的な分析を考察する。

2-2 調査協力者

調査協力を大阪大学工学部に所属する、イングリッシュカフェの運営を担当する（もしくはしていた）学生に依頼した。調査協力者6名（学部4年生～修士課程2年生）に対し、2016年11月に調査を実施した。

イングリッシュカフェは、工学部・工学研究科の留学生と日本人学生が英語で楽しみながら交流でき

る場を提供することを目的とし、前期約7回（5～7月）、後期約7回（10月～1月）の合計約14回のセッションを行っている。学生運営スタッフ（日本人学生3～4名）を中心に、ボランティアスタッフ（当日のゲームの企画・進行担当）、国際交流推進センター教員が協力し企画・運営をしている。毎回、交流を深めるゲームや軽食を用意することで、留学生と日本人学生との間に会話の生まれる「仕掛け」作りを工夫している。これらのゲームは、学生運営スタッフを中心に企画・実施している。なお、運営スタッフは実験などで忙しい大学院生が中心であることもあり、大学の公式な国際交流活動の運営スタッフであることの意味も含めアルバイトとして雇用され僅かな給与が支払われている。この意味で、ボランティア活動とは完全には一致しないことにも留意する。

3 調査結果

クラスター分析の結果出されたデンドログラムをもとにインタビューを実施した。同様の分析を行った6名の中から紙幅の関係上、以下の3名（調査協力者A、B、C）のデンドログラムとインタビューを抜粋し、クラスター（以下、CL）ごとの解釈を提示する。

3-1 調査協力者AのPAC分析

調査協力者A（修士課程・女性）のデンドログラムと各解釈を以下に示す（図1）。

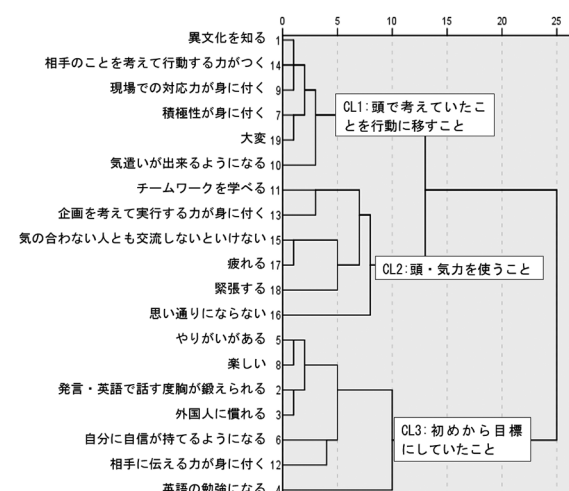


図1 調査協力者Aのデンドログラム

3-1-1 CL1：頭で考えていたことを行動に移すこと

- ①異文化を知る：留学生・日本人との交流を通して様々なことを知りました。
- ②相手のことを考えて行動する力がつく：自分が企画して当日実際に実行しているときに自分たちはこれがいいと思ってやっても当日の参加者の雰囲気を見てこっちの方がいいと気づいたら変えたり、考えるだけでなく行動に移すという力が身につきました。
- ③現場での対応力が身に付く：想定外のことが起こっても対応ができるようになりました。
- ④積極性が身に付く：考えていた事を行動に移すことを自分から積極的にやっていこうという気持ちというか。今までその踏み出す勇気というのがあまりなかったのでそれが身に付きました。
- ⑤大変：頭で考えて行動に移す時でもいいのかなと悩んだりというか気苦労というか、気持ち的に大変でした。
- ⑥気遣いが出来るようになる：相手にとって何がいいかというのを考えて実際にやると言うことです。

以上をCL1【頭で考えていた事を行動に移す】とまとめ、「考えるだけではなく行動にしっかり移す、実行することすべてがそれに対応している」としている。最初からこれらのことが出来たわけではなく、「スタッフを担当することによって行動に移す力、勇気がついたと強く感じる」と語った。そして、このクラスターの項目については運営スタッフを通して「ほぼ達成できた」と感じている。

3-1-2 CL2：頭・気力を使うこと

- ⑦チームワークを学べる：運営スタッフと話し合いの段階から当日も（中略）自然にチームワークができるようになっていったのがすごく良かったと思います。
- ⑧企画を考えて実行する力が身に付く：チームのメンバーにちゃんと伝えるというのも含め企画を考えそれを実行に移す力です。
- ⑨気が合わない人との交流：参加者の中には色々な人がいて（省略）そういう中でどうやっていくかが大変でしたが、これらの経験は他の人間関係にも役立っています。
- ⑩疲れる／⑪緊張する／⑫思い通りにならない：思い通りにならなかったりとか色んな人との交流で

もですし企画を考えて実行する時もこの企画で本当にいいのかなあと思って緊張したり。メンバーに伝える時でもいい意味で緊張したりというのはありました。

以上の項目をCL2【頭・気力を使うこと】とまとめた。これらに関しては、運営スタッフを始めたときと現在では「確実に成長した」と感じつつも、CL1【頭で考えていた事を行動に移す】の項目は「ほぼ達成できた」と感じるのに対し、CL2【頭・気力を使うこと】は「まだ自分の中では発展途上だとも思う」としている。

3-1-3 CL3：初めから目標にしていたこと

- ⑬やりがいがある：参加者の意見や様子を見て楽しそうというのが分かるのでやりがいを感じます。（中略）自分が参加者だった時に良かったことや逆にしなかったことをしてあげようと思い、英語で楽しく交流する日本人を見たらやって良かったと感じました。
- ⑭楽しい：やりがいがあって、私自身もゲームが楽しかった。運営スタッフとも色々笑う事はたくさんあったので楽しかったなあと。
- ⑮発言する度胸と英語で話す度胸が鍛えられる：今までは言えてなかったのがしっかり言おうと思えるようになったり言うことに恐れがなくなって、それがまた日本語じゃなく英語だったのでその度胸が鍛えられたと思います。
- ⑯外国人に慣れる：特に運営側だと（中略）参加者とは別で困っているのを助けてあげたり、（中略）スタッフの立場だからこそできることができたのでどんどん自信が持てましたし、スタッフとして絶対話さないとイケないシチュエーションもあったので慣れたというのもありました。
- ⑰自分に自信が持てるようになる：以上のようなことができるようになり、自分に自信が持てるようになりました。
- ⑱相手に伝える力が身に付く：2つあって、1つは日本人スタッフや他の企画をするメンバーに伝える力。あと当日、参加者に伝える力。それがだいぶ身に付いたと思います。
- ⑲英語の勉強になる：スタッフとしてゲームを開催する時に必要な英語を調べたり、無理矢理だけど自発的に英語を勉強する機会になったので。最初

はあんなにできると思ってなかったんですけども、だんだん慣れてきて。

以上をまとめてCL3【初めから目標にしていたこと】としているが、これらの項目は「全部プラスであり、目標にしている点、もともとできるようになりたいなと思っていたことだった」とした。調査協力者Aは、大学生になったら留学生と仲良くなりたいと思っていたが、その機会があまりないことに気づき、英語学習においても実際に使う場が欲しいと思っていた。そういった中、イングリッシュカフェの運営側にまわることで、結果的に単に英語で話すだけではなく項目にもあるように「外国人に慣れ」「人前で発言する度胸がつく」までに成長し、「自信」につながったといえる。

3-1-4 調査協力者Aの総合解釈

以上、デンドログラムと各項目の調査協力者Aによる説明、及びインタビューによる追加の質問から、総合的に解釈をする。

調査協力者Aが運営スタッフを担当しようと思った動機は、CL3の目標として掲げている、英語で発言する力や外国人に慣れるなどの自身の成長と、参加者として参加していた際に感じた企画の実現など大学の英語教育に関わりたいことの2つとしている。前者は、高校時代に2週間の海外研修に参加しうまくコミュニケーションを取ることができなかった経験から、大学に入って英語力を磨いたり留学生と交流したりしたいといった意識につながったと振り返った。後者は、インプットに重点をおいてきた日本の英語教育及び工学部の学生の英語嫌いに危機感を抱いていることが大きな理由であるとしている。研究室の同級生について「周りの友達がすごく優秀なんですけれども英語が大嫌いな子が多くて（中略）もったいないなあと思っていた。（中略）その優秀な彼らが英語ができてもっと海外に出ていったら日本ももっと明るくなるかなと思ったので。」と日本の将来を危惧し、彼らのような「英語が大嫌いな子」に「無理矢理させるには教育に無理やり組み込むしかない」と感じ、大学の英語教育に関わりたかった。そこで、何等かの形で英語教育に貢献し、「一人でも多くの人が英語ができるようになれば、その人の未来がもっと拓けるのでは」と感じている。さらに、彼らのような英語嫌いの学生にとってイングリッ

シュカフェのような英語を話す場は「喋るとなると英語が出来ないのがもう目の前でわかるじゃないですか。点数とかじゃなくて今、喋れなかったというのがすぐ事実として返ってくるんですけども、多分それが嫌なんだと思うんです。喋れないという事実がいちいち直面するというのが怖いんじゃないかなあ」と捉えている。このように、周囲の学生の研究における優秀さを認め、英語嫌いを「もったいない」と感じ、日本の将来のためにといった使命感を持ち取り組んでいることが分かる。

さらに、先に述べたグローバル人材の要素について調査協力者Aは、「100点満点ではないが運営側になることでこれらの力はついた」としている。デンドログラムを見ても、CL1に挙げられている項目を中心に、運営の経験が異文化理解力、柔軟性、積極性などの習得につながったことが分かる。それは、彼女自身の成長だけではない。「運営スタッフの経験で自信がついた」ことから、自身の所属研究室で日本語が話せない留学生と日本人との間に溝があると感じ、その間に入り相互理解を促すなど、学内の国際交流に貢献する様子が語られた。このような経験から、「またさらに鍛えられた」と感じ、「またさらにこの経験をもとに今も発展できていると思います」としている。

そしてこれらの経験が、企画及び実行力、チームワーク、英語で話す度胸など社会に出た際、「確実に役立つ」と考えている。運営スタッフとしての経験「これだけやってきたという自信」自体が大きな支えとなったとしている。

以上のように、運営側の経験が、彼女を大きく成長させ、社会に出たあとななどの将来にもプラスに働いていることが分かる。また、彼女自身の成長だけではなく研究室内の環境を改善するなど学内へのいい影響も生み出している。

3-2 調査協力者BのPAC分析

調査協力者B（修士課程・男性）のデンドログラムと各解釈を以下に示す（図2）。

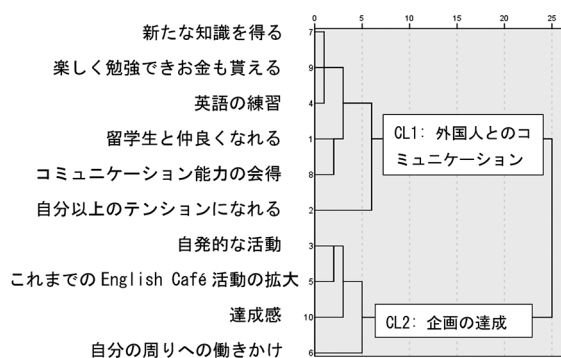


図2 調査協力者Bのデンドログラム

3-2-1 CL1：外国人とのコミュニケーション

- ①新たな知識を得る：国が違う人たちと交流することで、自分の国でこうと思い込んでいる知識（中略）の実際を知れる。
- ②新しく勉強できるしお金も貰える：給与がなかったらやっていないという事は無いですが、例えば研究で忙しい時に給与があると思うと行くモチベーションに少しはなります。大学院生になって研究のためにアルバイトもやめたので。
- ③英語の練習：運営スタッフになったことでゲームの進行や（中略）英語に対しての集中というか前の参加者側で行きたい時に行けばいいやというものよりは増えたと思います。もっと主体的になりました。
- ④留学生と仲良くなれる：日本人だけでなく留学生と仲良くなったら（中略）自分の中で新しい糧になったり文化背景というものも将来的に知ることでもあるのではないかって思って自分の中で重要だと思っています。
- ⑤コミュニケーション能力の会得：司会をやったりとかゲームの中でコミュニケーションを取ったりとかそれを気軽にチャレンジできるというか。
- ⑥自分以上のテンションになれる：自分の枠組みを越えて外国人と交流することでできることが広がったというイメージです。運営スタッフなので全体の雰囲気もより良くしていこうという意識があります。

以上の項目をまとめて、CL1【外国人とのコミュニケーション】とした。調査協力者Bは、こうまとめたことに関し、「人とのコミュニケーションが重要」とし、特に外国人とのコミュニケーションを取

ることで将来、エンジニアを目指す際に「日本人の自分+外国人の知識というのを足して合わせて作り上げていきたい」とした。そして、これらを運営スタッフの経験を通して習得することを期待している。

3-2-2 CL2：企画の達成

- ⑦自発的な活動：企画など全部自分たちで考えてやるというところ。
- ⑧これまでの English Café の活動の拡大：今まで積み重ねてきた先代の人たちの活動に加えて自分たちでできることを考えたり、これが自発的とも関連しているんですけども。
- ⑨達成感：その活動の先に見えてくるのが達成感なのかなど。
- ⑩自分の周りへの働きかけ：自分がやっているのが良い活動だから他の人にもその活動を経験してもらいたいという意味です。

以上の項目を、CL2【企画の達成】とまとめた。CL1が自身のスキル習得を中心とした項目なのに対し、企画し実行し達成すること、他者に配慮しながら自発的、主体的に動こうとする運営スタッフとしての意識が伺える。同時に、「企画力や実行力が将来のビジネススキルにつながる」という語りもみられた。

3-2-3 調査協力者Bの総合解釈

以上、デンドログラムと各項目の調査協力者Bによる説明、及びインタビューによる追加の質問から、総合的に解釈をする。

調査協力者Bが運営スタッフを担当した動機は、学部生の際に海外研修に行ったことが影響している。英語が大嫌いだった当時、留学から帰国した友人の成長に感化され海外研修への参加を決心した。しかし、1か月弱という短い滞在で外国人と十分に交流が取れず、自分の目標を達成することができなかったと感じ、大学院で再度の留学を希望している。そして、その留学準備の一環として、イングリッシュカフェ運営スタッフを担当することを選んだ。

一方、工学部の他の学生の多くは、「だいぶ内向き」と感じている。「基本的には理系の院生として理想的な、研究に打ち込むという姿にはなっている」が、「それだけで本当にいいのかなというのが正直な感想で。研究に生きるとしても色々あって、そういう幅広い知識を持つことに対しても少し恐れている

んじゃないか」と捉え、また、「重要だと思いつつも行動しきれていない人も多くいる」としている。

このような周囲の学生に対し、調査協力者B自身の挙げたCL1【外国人とのコミュニケーション】、CL2【企画の達成】両者において、グローバル人材に必要な要素が含まれており、「日本人だけではなく外国人をもまとめる点からリーダーシップ力も大きく成長する」など、運営を通してこれらの能力がつくとB自身は認識している。そしてこれらが結果的に、「例えば限られたリソースでいかに学生に広く周知し参加してもらうかを考えるなど将来のビジネスにも関連する」とし、Bの目指すエンジニアとしての将来へとつながると考えている。ただし、これらの意識は運営スタッフとしての活動から身に付いたものだけではない。Bの所属している研究室は自主性を重視し、研究方針から学会などの研究発表の機会まで自身で探すという方針を取っている。この方針を「めちゃくちゃしんどい」と感じつつも、「新しく物事を始めるときに（中略）幅広く見た上でどれがいいのかというのを判断事項を作った上で決めていくので」「将来的に重要なこと」としている。

3-3 調査協力者CのPAC分析

調査協力者C（修士課程・女性）のデンドログラムと各解釈を以下に示す（図3）。

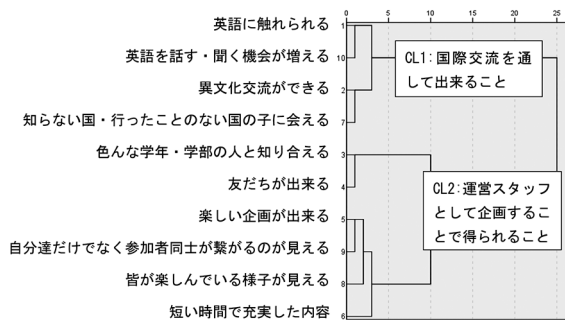


図3 調査協力者Cのデンドログラム

3-3-1 CL1：国際交流を通して出来ること

- ①英語に触れられる：約1か月の海外研修で毎日英語を使う生活だったのに帰国したら全然使うことがないと思ったのが運営スタッフをやろうと思ったきっかけです。司会進行などをする事で英語に触れられるというのが1番で、英語を話す・聞く機会が増えると思います。

- ②異文化交流ができる：英語だけではなく留学生の他の国の文化なども知れるというのものもあるのかなと思います。

- ③知らない国・行ったことのない国の子に会える：自分がよく知らない国の子にも会えるのも。

これらをまとめてCL1【国際交流を通して出来ること】とした。この1つ目のクラスターは「運営スタッフとしてよりも、イングリッシュカフェに参加することで身に付くことや利点」と説明した。

3-3-2 CL2：運営スタッフとして企画することで得られること

- ④色んな学年学部の人と知り合える：学年や専攻を越えて色々な人と知り合えます。普段研究室が基本で研究室外の人と知り合うことが少ないので。
- ⑤友だちができる：留学生・日本人関係なしに友達が増えると思います。
- ⑥楽しい企画が出来る：事前にスタッフで集まってゲームを考えたり、例えば（省略）どんなルールにしたらみんなが英語を使わなければいけない場面になるかなという話をして。みんなで決めていくのが楽しいです。
- ⑦自分達だけではなく参加者同士が繋がるの見える：皆楽しそうにお互い話していたりするので、皆ここに来て初めて出会った人たちでも、仲良くなっているのが見えていいなと思います。自分たちが企画したイベントに来てくれてそこで繋がってくれるのが嬉しい。
- ⑧皆が楽しんでいる様子が見える：これも先程のと同じです。
- ⑨短い時間で充実した内容：ゲームもみんな楽しんでくれるし2時間でこれだけできたら充実してていいかなって。

これらの項目をCL2【運営スタッフとして企画することで得られること】とまとめた。これは、1つ目のクラスターはイングリッシュカフェに参加する意義、習得できるものをまとめているのに対し、2つ目のクラスターは「運営スタッフとしての活動から得られると感じるもの」が挙げられている。

3-3-3 調査協力者Cの総合解釈

以上、デンドログラムと各項目の調査協力者Cに

よる説明、及びインタビューによる追加の質問から、総合的に解釈をする。

調査協力者Cが運営スタッフを担当した動機としては、CL1で挙げられた「英語に触れたい」という点が大きいのとしている。学内で英語を使う機会が少なく、運営側として企画などを通して英語に触れる機会を増やしたいと考え、またその根底にはCL1の項目で述べられたように短期海外研修への参加が関係している。

一方、研究室の友達については、「本当に研究室がコミュニティという感じになっていて、(中略)英語についても研究室の日本人学生は全然必要だと思っていない」と捉えている。「就職活動のためにTOEICの点数の勉強をするだけ」で、「実践的な英語には興味がなく社会に出た後も日本にしようと思えば日本にいられるしあえて必要ではない」と考えているとしている。そういった状況において、イングリッシュカフェでの「楽しい企画」を通して、「自分達だけでなく参加者同士がつながる」機会を生み出すことに、やりがいを感じていることがCL2の項目から分かる。

グローバル人材に関する要素に関しては、CL1【国際交流を通して出来ること】において必要なスキルを、CL2【運営スタッフとして企画することで得られること】において態度や意識の成長が期待できるとしている。研究室中心の生活を「狭い世界」と感じるCにとって、イングリッシュカフェの運営に関わることで「何か広がりが見られるのでは」という期待が大きい。そしてこれらのスキル、態度、意識は、「将来仕事で海外にも行きたい」という夢の実現への近道と捉えている。

4 考察

以上、調査協力者A,B,Cに対するPAC分析により、イングリッシュカフェ運営スタッフの経験について分析をした。3名の事例だけでは一般化することはできないものの、個人に焦点を当て、彼らの視点から明らかにすることで学内の国際交流イベントの運営の中心を担う学生の意識と成長を概観した。これらの調査結果から、3名の比較とまとめ、及び国際交流イベントの運営経験とグローバル人材について考察をする。

第一に、運営側に立つきっかけとして短期・長期

に関わらず海外留学経験が大きく関係していることが分かる。調査協力者A,B,Cの3名のみならず、残りの3名を含む6名全員が、何らかの形で過去に海外に滞在した経験を持ち、十分にコミュニケーションや交流を計れなかった悔しさが原動力となっていた。孫・村山(2008)は、学生の意識を視野に置く効果的な留学プログラムの展開が、高等教育での国際的人材教育を通じての日本の国際化に資する可能性がある」と指摘している。本調査協力者の例からも、学内外の国際交流の活性化やグローバル人材につながるリーダー的存在の育成に海外研修は非常に有効であるといえよう。言い換えれば、海外研修に参加する(した)学生を学内の国際交流活動へ誘導し、さらなる育成及びその他の学生への波及効果を狙う取り組みが重要であろう。そしてこの点から、海外研修において事前・事後のフォローの重要性も指摘できよう。

一方、彼ら3名の視点から、冒頭で述べたように、英語の苦手意識が比較的高く(ALC 2008)、専門以外のことに興味のない(毎日新聞科学環境部 2007)といった一般的な理系学生の存在が確認された。これに対し、グローバル人材には語学力、思考能力、発信力、ディベート力、プレゼンテーション力が求められている(宮本 2013)。研究者や技術者、科学者としてグローバルに活躍するには、高い専門性に加え、コミュニケーション力、多角的に物事を捉えることの出来る広い視野、異なる文化への理解、相互の信頼関係を築いてゆくネットワーク力などを総合的に身に付けなければならない。最先端技術の担い手である理系学生が社会に出る前にこれらの力を身に付ける機会の提供は急務を要する課題であり、グローバル人材育成の観点から、このような学生をいかに国際交流へと導くかが今後の大きな課題といえよう。實平他(2004)でも、国際交流に参加した学生が、異文化交流や意見交換の場は貴重であるが「貴重」であるべきではなくすべての学生が一度は経験しておくべきと語っている。そしてこの課題を解決する一つのキーとして、今回の調査協力者のような国際交流分野におけるリーダー的学生の活躍が期待される。

最後に、運営スタッフとしての経験とグローバル人材についてまとめたい。各クラスターの分析から運営スタッフとしての経験は2つに分類できると考える。第一に、自身の成長である。例えば英語力、

コミュニケーション力、異文化理解力、企画力など、グローバル社会で活躍するために必要なスキルを自身が習得できることに関する項目が挙げられている。また、この点において例えば調査協力者Aが運営スタッフを通して達成した目標や発展途上である項目などを整理するなど、本調査が協力者自身の自己省察を促し気づきを得るきっかけとなっている様子も観察された。そして第二に、他の学生、大学、さらには日本社会への意識である。3名の語りやデンドログラムの項目からは、単に1つ目の自身の成長のみならず、「参加者同士がつながる」「やりがいがある」「活動の拡大」といった国際交流への貢献を意識し（もしくは無意識に）取り組んでいることが分かる。これは先ほどの、彼らの周りの「英語が大嫌い」で「内向き」な学生への危機感、彼らの意識を変えたい、ひいては日本をよくしたいという思いが伺える。産学官によるグローバル人材育成推進会議（2011）によると、グローバル人材とは、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野にいたした社会貢献の意識などを持った人間」としている。彼らの「日本をよくしたい」という社会貢献の意識を持ち取り組む姿からも分かるように、彼ら自身の成長だけではなく、他の学生、大学、社会への影響が大きく期待できるといえよう。つまり、このような学生の育成が「内向き」を懸念する声が挙がる現状において国際交流を活発にし、グローバル人材育成実現への一つの道筋となるのではないだろうか。

5 おわりに

法則定立的な研究法が一般的な平均値としての人間を解明することを目的としているのに対し、PAC分析は「人間はそれぞれに独自の世界を持つ異質な存在である」という分析法の概念に従い、唯一無二の対象者を研究の対象とすることに十分な研究価値が存在するとしている（中川 2013）。本稿で取り上げた3名の結果も、その代表性を明らかにし傾向を把握するものではなく、個々人をより深く理解する点に意義がある。PAC分析において、調査協力者の

自己表現力（言語化する能力）に分析全体の質が左右される可能性は避けられない。しかし、たとえ一部であったとしても、PAC分析の特徴である3名の意識を内面から確認することにより、運営スタッフとしての経験とそれらに対する意識及びグローバル人材との関連が明らかとなったといえよう。今後は更なる分析やインタビューの継続により、グローバル人材育成、特に理工系学生に焦点を当てた研究の促進、そして理工系学生にとってより効果的な国際交流プログラムの開発と実施が期待される。

注

- 1) 土田先生からPAC Assist ツールソフトを直接送っていただいた。<http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm>（2016年11月10日参照）

参考文献

- 岩城奈巳（2012）「留学推進の取り組みが交換留学に与える影響についての実態調査」『名古屋大学留学生センター紀要』第10号，p.23-29.
- 梅本松助（1995）「日本における文系・理系分野教育歴史」『日本教育学会大会研究発表要項』第54号，p.206-207.
- 岡本久吉（2011）「これからの日本におけるグローバル一流人材の育成」『LEC 会計大学院紀要』第8号，p.73-92.
- 久保田美映・鈴木理子（2016）「日本語ボランティア活動がグローバル人材育成につながる可能性——留学生対象日本語授業に参加した日本人大学生Aさんの事例から——」『桜美林大学 Obirin today：教育の現場から』第16号，p.73-89.
- 小島奈々恵・内野悌司・磯部典子・高田純（2015）「日本人大学生の国際交流に関する意識調査——『内向き志向』と国際交流意思の関係——」『広島大学保健管理センター研究論文集』第31号，p.35-42.
- 實平雅夫・河合成雄・瀬口郁子（2004）「キャンパスにおける交流プログラムが日本人学生に与えるインパクト——神戸大学国際学生交流シンポジウムを事例として——」『神戸大学留学生センター紀要』第10号，p.85-104.
- 末田清子（2001）「留学体験の意味づけ——大学生の留学前及び帰国後の滞在国に対するイメージ分析を通して——」『Journal of Intercultural Communication』第4号，p.55-74.
- 孫京美・村山皓（2008）「大学の留学プログラムと国際交流政策」『立命館人間科学研究』第17号，p.75-91.
- 高梨宏子（2012）「大学生ボランティアの地域日本語教室活動に対するPAC分析調査」『言語文化と日本語

- 教育』第43号, p.1-10.
- 内藤哲雄 (1993)「個人別態度構造の分析について」『人文科学論集』第27号, p.43-69.
- 内藤哲雄 (2002)『PAC分析実施法入門 (改訂版)「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 中川典子 (2013)「日本人留学生の異文化接触とアイデンティティ留学前、留学中、帰国後のイメージ分析を通して」『流通科学大学論集. 人間・社会・自然編』第25号2, p.53-75.
- 中橋真穂 (2015)「理工系大学院生のグローバル人材育成に向けた短期海外研修—PAC分析による参加者の意識変容に着目して—」『グローバル人材育成教育研究』第4号, p.46-47.
- 毎日新聞科学県境部 (2007)『理系という生き方理系白書2』講談社
- 宮本美能 (2012)「超短期プログラムのポテンシャル：A大学におけるオーストラリア語学研修プログラムの一事例考察」『留学生交流・指導研究』第15号, p.77-87.
- 宮本美能 (2013)「超短期プログラムのポテンシャル：A大学におけるオーストラリア語学研修プログラムの一事例考察」『留学生交流・指導研究』第15号, p.77-87.
- 文部科学省 (2010)「グローバル30推進上の課題と実現への期待」『第1回グローバル30産学連携フォーラム配布資料』
- 文部科学省 (2011)「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」『グローバル人材育成推進会議3』 http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_kyodo/sanko1-1.pdf (2016年11月25日参照)
- 文部科学省 (2016)「日本人の海外留学状況」 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/__icsFiles/afldfile/2016/11/11/1345878_1.pdf (2016年12月10日参照)
- リクルート進学センサス (2013)「グローバル化社会における大学進学者の留学意識」http://www.recruit-mp.co.jp/news/library/pdf/20130627_01.pdf (2016年11月25日参照)
- 渡部留美 (2009)「短期海外研修のプログラム作りと課題—大阪大学グローニンゲン大学短期訪問プログラム実施報告—」『多文化社会と留学生交流』第13号, p.75-82.